

世界に勝つものづくりのコツ

第 12 回

中小企業の海外展開を強力にバックアップする「広域首都圏輸出製品技術支援センター (MTEP)」。
 ここでは、MTEPの専門相談員がよくある質問やサポート内容、海外展開のコツをご紹介します。

安全規格に押しよせる新しい流れ ～リスク分析を積極的に～

いし い みつる
石井 満 専門相談員

水曜日担当

 専門: CEマーキング・機械指令・
 低電圧指令・EMC指令


プロフィール

松下電器(株)(現パナソニック)にて、UL、CSA、欧州の安全規格、EMC等の製品安全、品質管理に従事。ドイツにてパナソニック製品のCEマーキング体制を構築。現在、CF Mediaコンサルタントとして製品安全、労働安全衛生、リスク分析、マニュアル作成等の支援を行っている。CEマークはEMC指令、低電圧指令、機械指令、圧力機器指令、医療機器指令などに対応可能。諸外国への認証、法規対応、CEマーキングおよび各国の取扱説明書作成支援なども実施。

▶ リスク分析で安全性が 評価される時代

海外へ製品を輸出する際には、それぞれの安全規格に適合したものづくりをしなければいけないという考え方が日本の企業にも定着してきました。しかし、規格に書いてあることを守りさえすれば良いと考えている方が多くいます。規格は、過去に起きた事故などの情報を基につくられており、あくまでもこの基準をクリアしていれば安全だとみなされるものです。そのため、将来起こりうる事故に対応しているわけではありません。ISOやIECといった国際規格では、将来起こりうる事故のリスクを軽減するためにも、メーカーが行ったリスク分析に基づいて製品の安全性を評価するように規格を改めています。

国際規格の変化はそれぞれの地域にも波及しており、CEマーキングもリスク分析を重視するようになってきました。また、日本の電気用品安全法でもリスク分析に基づいた安全評価を認める方向になっています。つまり、これからの時代のものづくりには、リスク分析がより不可欠になってくるのです。

▶ まずは製品の使い方を考える

リスク分析というと、日本の企業では構えてしまう方が多いのですが、それほど難しいことを要求しているわけではありません。ま

ず、その製品を、誰が、どういう環境で、どのように使うのかを考えることから始めれば良いのです。そうすれば、その製品の使い方が見えてきます。

そして、似たような製品が起こした事故の事例を収集していけば、自社で開発している製品がどのような問題を起こす可能性を秘めているのかがわかってきます。そこまで具体的に絞り込むことができれば、後は、その問題を設計による本質的安全対策で解決するのか、安全装置を付加して対策するのか、または必要に応じて警告ラベルや使用説明書でユーザーに注意喚起していくのかといった具体的な方法を検討することになります。

▶ 安全な製品をつくるために 何ができるか

安全規格が要求しているのは、「製品は安全であること」だけです。そのため、規格そのものも不完全である可能性も視野に入れています。まず、規格ありきという姿勢を見直す必要があります。自社製品にリスクがあることを前提として、どの規格を使えば製品を安全にすることができるのか、その規格で十分かという考え方が必要になってきます。規格が要求している内容だけでは、真の安全を実現することはできません。足りない部分を自分で補う問題発見能力も問われているのです。

▶ 事例紹介

製品を輸出するために相談に来られた照明器具メーカーの方に、リスク分析が求められるヨーロッパの新しい指令について説明しました。その結果、リスク分析を行い、より安全な商品を開発できるように設計制度の変更を検討されるようになりました。

【中小企業の皆さまへ】

リスク分析は、製品を企画・設計する段階できちんと行う方が、最終的にコストが安くなります。MTEPに相談に来られる企業の方々は、現在製造している製品を輸出するために規格の認証を取りたいというスタンスの方が多く、リスク分析と聞くとコストがかかるという印象をもたれる方もいます。皆さまの会社では、設計段階でデザイン・レビュー、製造段階で品質会議等を実施していると思います。それぞれの工程のチェックポイントでリスク分析の視点を入れる(チェックリストを作る)だけで、リスク分析は可能です。一時的には手間やコストがかかるかもしれませんが、販売後に事故が起きてしまえば莫大な費用が必要になりますし、信用も失います。重大な事故によって失うものを考えれば、リスク分析のコストは安いものなのです。



お問い合わせ 輸出製品技術支援センター<本部> TEL 03-5530-2126